

科技高 いきもの記 Vol.42 2021.12.15

佐藤龍平

由来を知れば見かたが変わるかも カエデという名前



猿江公園のカエデ（イロハモミジ *Acer palmatum*）

緑色の色素「クロロフィル」が分解され、「アントシアニン」という赤色の色素が液胞に貯まると、葉が緑から赤に変化する。落葉させる葉になぜ植物がわざわざアントシアニンを作るのかはよく分かっていないらしい。黄色の葉は「カロテノイド」という別に色素による。



↑猿江公園の秋の風景

南側は落葉樹が多いので、紅葉が美しい。ちょうど背中にイロハモミジの葉が乗っている。



↑トサカ（鶏冠）

“鶏冠木”と書いてカエデを指すのだそう。確かに、カエデの葉に似ている。

猿江公園の紅葉がそろそろ見頃を終えようとしている。今年もカエデの仲間がとても綺麗に色づき、日本の秋を美しく彩っていた。

猿江公園のカエデの仲間は、イロハモミジ、トウカエデなどがある。こう言う「モミジとカエデって何が違うの」とよく聞かれるのだが、生物学上の厳密な区別はなく、〇〇モミジも〇〇カエデも全て「カエデ属の植物」を指している。海外ではカエデ属をまとめて「maple」と言うので、カエデとモミジを言い分けているのは日本だけだろう。（ちなみにメープルシロップを作るためには、サトウカエデ（砂糖楓）という種類のカエデから甘い樹液を採取する。）

カエデやモミジの語源について調べていると、ある万葉集の歌に出会った。

やど もみ かへるで いも こ
わが屋戸に黄変つ蝦手見るごとに妹を懸けつつ恋ひぬ日は無し（万葉集巻八・1623）

（訳：私の家の黄色に色づいたカエデを見るたびに、あなたを心に懸けて恋しく思わぬ日はありません。）

これは、大伴田村大嬢という女性が、妹の坂上大嬢のことを思って詠んだ和歌だそう。カエデが色づくのを見て季節の変化を感じたのだろう。大切な人への思いを季節の移ろいにあわせて表現した美しい歌だ。当時の人たちは色が変わることを「もみつ」と言っていて、この言葉から「もみじ（紅葉）」と転じたそう。この当時は、色が赤くなることではなく、黄色くなることをもみつ（黄変つ）と言っていたみたいだから、もみじ（紅葉）の語源は“紅”ではなく“黄”なわけだ。

また、“カエデ”は“かへるで”から転じた言葉で、調べてみると“カエルの手（蝦手・蛙手）”に形が似ていることが由来だそう。ヒトの手ではなくカエルの手を選ぶセンスが素敵だと思う。また、“かへるで”という言葉に“鶏冠木”という漢字をあてることもあるようで、これは、カエデの葉を鶏冠、つまりニワトリのトサカに見立てている。改めて見てみると、確かにトサカってカエデの葉に似ているな。今まで考えたこともなかった。こうやって、いきものの語源について調べてみるのもとても面白い。

さて今度は、“楓”という漢字を見てみる。“木”が“風”に揺れている情景が浮かんできて、これも何だかとても風情がある。昔の人は、美しい落ち葉がはらはらと舞っている様子を見ながらこの漢字を作ったんじゃないだろうか。しかも、よく見ると“楓”の字の中には、小さく“虫”の字がいるのだ。いきもの要素満載だ（これに気付いた時ちょっと嬉しくなった）。“楓”は虫もカエルも鳥も、そして秋の美しさも盛り込んだ、自然がぎゅっと詰まった素敵なお名前だ（ちょっとこじつけだけど）。みなさんも、生物の名前の由来を調べてみるのはどうだろう。その生物に対する見かたも変わるかもしれない。

これは余談だが、実はこの秋に生まれた我が子の名に楓の字を使うことにした。日本の美しい四季を誇り、自然への畏敬の念を大切にしたいと願いを込めている。